

片袖の恋

― 千葉の鬼小町・さな子 ―

三月千尋

さな子「やあっ」

パン、と竹刀が防具を打つ音。

さな子「とうっ」

パン！

さな子「隙あり！」

パパーン！

男の声「勝負あり、さな子どの！」

定吉「強いのが、うちの鬼小町は」

NA(さな子の声。以下同じ)「のっけから失礼いたしました。時は幕末の始まる少し前、私はお江戸・千葉道場の娘、さな子と申します。幼い頃から剣が遊び道具、十の歳には兄の腕を追い越していました」

定吉「さな子、お前はこれまでじゃ」

さな子(10歳、以下同じ)「父上どうして？ 私もお兄様と同じく、剣の道を極めます」

定吉「いかん。子供といえどお主は女じゃ」

さな子「女ですから、やがてお嫁に行きますでしょ？」

定吉「剣術はいらんじやろう」

さな子「いいえ。嫁ぐ時こそ勝負どころです。お父様の娘だというのに剣のたしなみがないなんて、千葉家の恥でござります」

定吉(感動)「さな子……」

NA「そんなことを言つて父をたぶらかし、あつという間に免許皆伝。今では、『千葉の鬼小町』とも呼ばれております。」

さて、お江戸では剣術修行が花盛り、私も十七歳の花盛り。各藩の武家の「子息がござつて道場へ入門し、腕を磨いておりました」

定吉「さな子、入門者じゃ。支度をせい」

さな子(10歳、以下同じ)「はい。心得ました」

NA「娘といえど、道場に若い女子。風紀の乱れを案じた父は、私に入門者全員の初手合せを命じました。女の私に負ける事で、若者たちの思い上がりの鼻っ柱と、恋心の芽を根こそぎにする戦略です。」

さて、今日の入門者とは」

竜馬「土佐藩士、坂本龍馬です」

定吉「はじめ！」

少しの間(2人、間合いを見ている)。

竜馬「あ、さな子殿、後ろ！」

さな子「えっ？」

パン、と軽く竹刀の音。

竜馬「隙あり一本です。まさか、こんな子供だましの手に引っかけるとはのう」

定吉「さな子、お前の油断だ。勝負、坂本」

さな子「ウソ。待って！」

竜馬「ハハハハ」

NA「これが、坂本龍馬の道場1日目でした。」

底抜けに明るい方でしたが、皆さんが騒いでいる時には、一歩ひいて全体を眺めていらっしゃる、そんなところもあつたりして」

宴席で賑わう若者達のざわめき。

NA「その日も、道場暑気払いの宴席中、廊下に座り込んでお文を書いている坂本様の姿がありました」

さな子「坂本様！」

竜馬「あ、すまん。じやまかのう」

さな子「またお文ですのね。どなたへ？」

竜馬「乙女どのにじや」

さな子「えっ？ 誰に？」

竜馬「乙女さんだよ」

さな子「声が高くなる）どうして乙女に？」
竜馬「大切なお人じゃきにのう」

さな子「さらに高声）大切な人でござますか」
竜馬「ほうじゃ」
さな子「ご、ご無礼つかまつりましたっ」

NA「この時わたくしは、とても恥ずかしい
勘違いをしていたのです」

廊下を走り去っていく、さな子の足音。

竜馬「……江戸では、姉殿に手紙を書くのは
無礼なのかいな？」

NA「乙女どのとは、いうまでもなく坂本様のお姉さま。幼くして母を亡くした坂本様にとって、
母上のような存在です。
ところが偶然、私の幼名も『乙女』というのです。改名したのは十歳の時、ごく親しい者しか
その名は知らないはずでした」

さな子「どうして坂本さまが私の名を？ しかも私に文を……た、大切な方？」

ワハハハハ、と竜馬の大笑いの声。

さな子「忘れてください！ 坂本様、後生で
すから忘れてください」

竜馬「そうか。わしがさな子さんに文をのう」

さな子「だから勘違いです」

竜馬「さな子さんは、わしからの文を待つておられたのか。悪いことをしたのう」

さな子「待つてなどおりません！」

竜馬「どおりで様子が上の空じゃった」

さな子「いいえ、もうしっかり地に足がついておりました」

竜馬「わしの事を想うておったとは」

さな子「想ってません！」

竜馬「想うておられたぞよ」

さな子「思い違いです」

竜馬「わしは想うたぞ」
さな子「えっ」
竜馬「上の空のさな子殿を見て、わしの心もふんわり空へ昇っておった」
さな子「空へ……？」
竜馬「あなたは、思い違いとおっしゃるが」

NA「恋とは人生における最大の勘違いなのだと聞いたことがあります。私の勘違いから生まれ
た会話の、この蒸気のような温かな感情を、恋と呼んで許されるでしょうか」

パンツと襖の開く音(定吉が駆け込んだ)

定吉「ここにおったか」
さな子「お父様。どうされたんですか」
定吉「竜馬、至急に土佐藩邸へ行け」
さな子「何か大事ですか」
定吉「黒船じゃー！」
竜馬・さな子「黒船……？」
定吉「ああ、江戸中大騒ぎになっとる」
竜馬「黒船はどこに来とるんですか」
定吉「浦賀じゃ」
竜馬「浦賀ですね！ 御免！」

竜馬、走り去る音。

定吉「竜馬どこへ行く！ 藩邸は逆方向だろー！」
さな子「さな子も参ります」
定吉「さな子！ 竜馬！ さな子、さな子！」

NA「黒船と聞いて、黙ってはられません。叫ぶ父の脇をすり抜け、私は坂本様の背中を追い
かけて走りました。紫色の、麻の葉模様の小袖をひるがえして」

さな子「坂本様！ 待ってー！」
竜馬「おお、さな子さんも行くんかいー！」
さな子「だって、黒船見たいものー！」
竜馬「わしなぞこの為に江戸に出てきたよう

なもんじや」

さな子「どうして皆さん、来ないのかしら」

竜馬「なんでじゃるなあ」

さな子「みなさん、お口ばかりね」

竜馬「よーし、走るぞいー!」

さな子「はいー!」

NA「皆さんが来ない理由は、ほどなく分かりました」

2人の足音…息の切れる音。

NA「遠いのです」

足音、ザツザツ……と続く。

NA「江戸城を右手に見ながら、武家屋敷街を通って東海道に入りました。新橋を過ぎ、海沿いに浜離宮が見える頃には町屋が多くなり、品川を過ぎると江戸の風情はがらりと変わります。保土ヶ谷宿から東海道を外れ、浦賀街道へと入る頃に日が暮れて参りました。江戸から浦賀まではざっと十六里ほど。六、七〇キロを徒歩で行くのです」

さな子「今どこでしようね」

竜馬「(叫ぶ)おーい。坊、こゝはどゝじや?」

子ども「(叫ぶ)生麦じや、お侍さん」

竜馬「(叫ぶ)ナ・マ・ム・ギ?」

NA「9年後、薩摩藩士がイギリス人に斬りかかった、あの『生麦事件』の生麦です。辺りは一面の麦畑。納得の地名です」

竜馬「ふあああ(あくび)」

さな子「坂本さま、眠いのは分かりますけど、先を急がないと」

竜馬「そうじやな。(大声で)生麦生米生卵!」

さな子「なんですか、いきなり」

竜馬「眠気覚ましじや。行くぞい」

竜馬・さな子「ナナムギナマ、コメナタマゴ、生麦生米生卵! (繰り返し唱和する)」

足音続き……一番鶏の声。(夜が明けた)

さな子「声弱っている(生麦生米)」

竜馬「同じく弱っている(生卵)」

さな子「生麦生米」

竜馬「ナマナナゴ……浦賀はまだかのう」

さな子「この辺のはずなんです」

竜馬「難儀な地形じゃなあ」

NA「三浦半島というのは起伏の多い場所で、私たちは坂道を登ったり降りたり。はあ」

さな子「坂本様、あの切り通しの奥は？」

竜馬「海のおいがる。行くぞい！」

さな子「はい！」

NA「寝不足と走り疲れてへろへろの私たち。最後の力を振り絞り、つたに覆われた狭い切り通しを岩壁に沿うように通りました」

波の音。

竜馬「さな子さん！」

さな子「坂本様！」

竜馬・さな子「黒船！」

波の音、さらに強く。

NA「優雅な曲線で描かれた、漆黒の重厚な船体。真っ直ぐに立つマストと、やはり黒光りする緻密な部品の数々。初めて見る黒船は、まるで大きな楽器のようでした」

竜馬「まっこと、美しいのう……」

さな子「本当に。きれい……」

NA「異国の船が浮かぶ明け方の港で波の音を聴きながら、私達2人はいつしか眠ってしまいました。坂本様は、私の片袖を枕にして。……人生の宝物のような瞬間は、意外にもさりげなく訪れ」

勝「おい起きろ。君達も黒船見物に来たのか」

NA「そして、あっけなく破られました。眼を覚ますと、そこにはチヨヨママカと落ち着きのない小柄な中年のお侍様がひとり」

勝「ほらほら。あの船の、あそこの部屋。異人がいるみたいなんだがね」

竜馬「ほう！」

勝「見たいじゃないか、どんな面してるのか」

竜馬「見たいですな」

さな子「見たいわ」

勝「お前さん、わしを担いでくれんか」

竜馬「肩車ですな。心得ました」

竜馬、「ヨッ」と勝を肩車。

竜馬「どうですか。見えませんか？」

勝「あつ……笑ってやがる。なんか黒い板みたいなもの齧って。うまそうだなあ」

竜馬「笑っちゃいますか……」

勝「ああ、ありがとう。降ろしてくれ」

勝、着地する音。

勝「君達は、江戸から歩いてきたのかね」

さな子「はい。一晩かけて」

勝「苦勞なことだ。あの黒船なら一刻だな」

さな子「一刻で十六里……」

勝「座ったまま、海を渡って来られるさ」

竜馬「へえー!! 海をバーンと。豪快ですの!!」

勝「お前さん、名は？」

竜馬「土佐藩士、坂本竜馬です」

勝「わしは講武場の勝だ。訪ねておいで」

竜馬「船の話、教えてもらえますか」

勝「お前さんに、もっと広い世界をみせてやりたくなくなった」

走り去る馬の足音。

NA「落ち着きのないお侍さまは、馬で走り去って行かれました。これが、勝海舟先生。坂本様と日本と、そして私の運命も変えたお方との、はじめの出会いでござります」

ドンツと机を叩く音。

定吉「さな子！ このバカ者！」

さな子「ふああー」

定吉「あくびで応えるな！」

さな子「夜通し駆けたもので」

定吉「女ひとり、黒船なぞ見に行く奴がいるかー」

さな子「坂本様も一緒でしたよ」

定吉「もつと悪いー」

NA「この時代、夫婦でない男女が街中を歩く事はご法度。父の怒りは相当なものでした。……さて。その頃、坂本様は」

ガラツと木戸を開ける音。

竜馬「御免！ 勝先生に御用です」

勝「誰かと思えば坂本くんか。昨日の今日でもう来たのかい」

竜馬「あ、ご迷惑でしたかいのう」

勝「娘さんの方はどうしたい」

竜馬「さな子さんは、定吉先生に絞られちゃります」

勝「ああ、あの娘さんが千葉の鬼小町か」

竜馬「やっぱり有名ですか」

勝「想像していたより胸が大きいねえ」

竜馬「実際は、もつと豊かですよ」

勝「バカを言っていないで、奥へおいで」

竜馬「（小声で）先生が先に言いだしたのに」

襖を開け閉めする音。

勝「そこへお座り」

竜馬「この上ですか」

勝「違う違う、あぐらをかくんじゃないよ、

「こういう風に、足を前へ出すんだ」

竜馬「腰掛けて、こうですか？」

勝「お前さん、体格は西洋人並みだね。わしなんぞ足が宙に浮く。プランプランだ」

竜馬「ウフツ。楽ですね」

勝「これがチエアだよ。西洋では食事をする

時も文を書く時も、全部「れだ」

竜馬「へええ。世界は広いですな」

勝「こんなの序の口だよ。こっちを「覧」

竜馬「地球儀ですか」

勝「よく知ってるじゃないか」

竜馬「実家が商いをしちよるもんで」

勝「さあ坂本君。これからが本題だ」

竜馬「ん？」

勝「このチンまい点々が日本、ぐるっと回って大きな台形、これがアメリカだ。昨日見た黒船の

持ち主だよ」

竜馬「ほーう」

勝「このごでかい奴らが、わが江戸幕府に開国せいと突きつけてきた。さてどうする？」

竜馬「開国とは何ですか？」

勝「いきなり話の腰を折ったな」

竜馬「悪いですのう」

勝「ま、無法者が『俺と杯を交わし契りを結べ』と門をこじ開けてきた、そういう話だ」

竜馬「ふーむう」

勝「何か策はあるかね？」

竜馬「門前にてお帰りいただく」

勝「フン、なるほど」

竜馬「お侍なら、そう言うのでしょうか」

勝「お前さんは違うのかい」

竜馬「先見の明のある商人なら、そういう客

人を大事にいたします」

勝「商人ならば、か」

竜馬「一見面倒な客ほど、新しい事を知ってたり良い伝手を持ってたりするもんです」

勝「とすると？」

竜馬「とりあえずは招じ入れて、舐められん程度にもてなすのが正解でしょうな」

勝「坂本君」

竜馬「はい」

勝「私も同意見だ」

竜馬「もてなしますか」

勝「ただね、坂本君。今、黒船の相手をしているのはお侍様の大親分なんだよ」

竜馬「徳川様のことですか」

勝「そこで相談なんだが」

竜馬「はい」

勝「お侍の大親分をオレは改革したいんだよ」

ダーツと廊下を駆けてくる音。

竜馬「さな子どのー」

さな子「どうしたんですか、いきなり」

竜馬「黒船バンザイ！わしは道をみつけたぞ」

さな子「え？あの勝先生のことですか」

竜馬「そうじゃー！」

さな子「ちよつと、どこへ行くんですか？」

竜馬「土佐に、手紙を書くー！」

竜馬（朗読）「エヘンエヘン。この度は、是非ご報告いたしきこと存じ候。本日、勝海舟大先生御大の一番の弟子となりし候。これにて私も、天下に足る一角の人物となりし候。エヘンエヘン、かしこ、エヘンー！」

NA「さて。そうこうしているうちに坂本様は土佐へと帰る時が参りました。この時代、藩と藩とは外国同士のようなもの。お上が認めた期間が終了次第、お国へ帰らなければ、罪となるのです。変な時代です」

竜馬「千葉先生、お世話になりました」

定吉「うむ。気をつけてな」

さな子「また江戸にお戻りになるのですよ？」

竜馬「ああ、そのつもりじゃ、さな子さん」

さな子「待っています」

定吉「さな子、お前は「こまごまじゃ」

さな子「なぜ？私も品川までお送りします」

定吉「いや、方角が悪い。ここでお帰り」

NA「意地を通すのものはしたくないと思い、私は道場の玄関にて坂本様とお別れました。悔しいですが、坂本様はウキウキしておられました。久々の帰郷が嬉しいのでしょうか」

定吉「竜馬、話がある。歩きながら聞け」

竜馬「はい」

定吉「お前、故郷に決まった人でもおるのか」

竜馬「嫁御の話ですか」

定吉「そうだ」

竜馬「今度帰れば、そんな話も頂戴しますか

もしれません。わしも二十歳ですきに」

定吉「そうか」

竜馬「もつとも、断るつもりですが」

定吉「なんだと？」

竜馬「まだ、北辰一刀流の免許皆伝をいただ

いておりません。修行半ばの身です」

定吉「うむ。竜馬」

竜馬「はい」

定吉「さな子の事をどう思っている？」

竜馬「それは……」

定吉「例えばじゃ。今度お主が江戸に戻って来た時、さな子もお前も独り身だとしたら」

竜馬「さな子殿ですか。気の毒ですのう」

定吉「茶化すな。聞け」

竜馬「はい」

定吉「嫁に、もらってはくれぬか」

NA「さて、坂本さまがどう答えたかは後のお楽しみ。私に内緒で父とこんな重大な話をした後、そのまま土佐へ帰ってしまいました。さて、それからの私ですが」

さな子「やあっ」

パン、と竹刀が防具を打つ音。

さな子「とっつ」

パン！

さな子「隙あり！」

パン！

男の声「勝負あり、さな子どの！」

NA「お見合い相手に連勝、いや連敗、いい連勝……とにかく縁談は数あれど、ひとつも実らずにありました」

定吉「さな子よ、また勝ってしまったのか」

さな子「お父様。ええ、あっけなく」

定吉「しかし、なんで見合い相手と試合をせにやなんのだ？」

さな子「あら、お父様がお考えになったのよ」

定吉「年頃というものがあるよ、お前」

さな子「さな子は剣の劣る方でも構いません」

定吉「なぬ？」

さな子「けど、お座敷でお話するより剣を交える方が、お互いの事が分かりますもの」

定吉「そういう所がいかなのじゃ」

さな子「それにしても、縁がありませんね」定吉「うーむ」

NA「私はそんな体たらくでしたが、2人の妹、りき、きくは無事に嫁いで行きました」

りき「さな子お姉さま、ではこれで」

きく「さな子お姉さま、お父様を頼みます」

りき「順番が逆さで」免なさい。でも、お姉様には待つている方がいらっしゃるから」

NA「待つている……ええ、正直なところ、待つておりました」

遠くから聞「ええ、去っていく風の音。」

NA「それから2年、私がちょうど二十歳を迎えた夕過ぎ。新橋からの帰り道、私は不覚にも怪しい男に後をつけられてしまいました。江戸の治安も、悪くなっております」

ヒタヒタと迫ってくる足音。

さな子「まだつけてくる。しつこいわね」

ヒタヒタヒタ……

さな子「(小声で)仕方がないわ」

NA「相手をしようと観念したその瞬間、私の背中にスツとつけた人物がおりました」

さな子「キヤッ」

竜馬「(声を潜めて)さな子さん」

さな子「(同じく潜めて)坂本様!？」

竜馬「シッ、声をたてちゃいかん」

さな子「お久しゆう……」

竜馬「挨拶は後じゃ。相手は何人いる？わ

しは近眼でよく見えんきに」

さな子「2人・いえ、3人です」

NA「複数人を相手にする時、味方同士が背

中合わせになるのは、剣法の定石です」

竜馬「ではわしが2人、さな子さんが1人か」

さな子「斬るのですか?」

竜馬「いいや、殺生は無用だ。先手で倒して、その隙をついて逃げましょう」

NA「2年ぶりに会う坂本様は、一段と大き

くなられたようで、小柄な私は、その大きな背中に覆われて守られるようでした」

竜馬「わしが合図する。よろしいですか」

さな子「はい。心得ました」

NA「声が震えたのは、暴漢が怖いからではありません。合わせた背中と背中の間は、わずか一寸ほど。夜の闇の中で坂本様の気配が私を包み、あの蒸気のような温かな感情が、再び甦ってくるようでした」

竜馬「今じゃー!」

カキンカキン!と刃の音。

NA「暴漢の白刃が闇に舞った瞬間、坂本様の刀も空を切り、向かってきた1人を力で押し、返す刀でもう一人も峰打ちに」

同時にボスッと蹴り音。

男の声「ううっ」

NA「わたしは、目の前の男の急所を蹴り上げ、悶絶させました」

竜馬「さな子さん、逃げるぞ!」

さな子「はい!」

NA「夜の江戸を、私と坂本様は走りました。不忍池から町屋の路地を抜け、昌平橋を渡って、神田小川町の道場へ…私は、あの浦賀へ行った日を、思い出していました」

さな子「道中、よくご無事で」

竜馬「ああ。今朝、江戸に着いた」

さな子「土佐はいかがでした? 乙女様は?」

竜馬「その話なんだが」

さな子「お話?」

竜馬「さな子さん。わしは故郷を捨ててきた」

さな子「捨ててきた? まさか」

竜馬「志士になる。天下を救うには、もうそれしかないんじゃ」

NA「『志士』。志す士とは書きますが、要は天下の素浪人。坂本様は晴々としたお顔をされていましたが、実に不安定な身分です」

さな子「坂本様、では住むところもないのでしょうか。千葉の道場にいらっしゃれば?」

竜馬「道場に?」

さな子「今、お師範が足りないの。妹が出て行った部屋が空いてるし」

竜馬「いいんじやろか」

さな子「父に、私からお話をします。……お入りになって」

NA「父に事情を話すと、少し考え顔でしたが、頷きました。坂本様は父のお気に入り弟子で、剣の腕もありましたから、私は何の心配もせず、道場住まいを勧めたのです。しかし、その夜」

定吉「竜馬。話がある」

竜馬「はい」

定吉「道場に住むのはかまわん、いや、大歎

迎だ。後輩の指導にあたってくれ」

竜馬「精進いたします」

定吉「しかし、竜馬。本当に脱藩したのか」

竜馬「自由の身でなければ成されぬことがございますゆえ」

定吉「そうか……さな子のことだが」

竜馬「はい」

定吉「縁組の話は、忘れてほしい」

竜馬「わかちよります。……それも承知の上での国抜けです」

定吉「こちらから出した話を、忍びないが」

竜馬「いいえ。素浪人の身で千葉の姫御前をいただくわけに参りませんでしょう。2年前とは、事情が違います」

定吉「すまん。わしも、あいつの行く末が心配なんじゃが」

竜馬「では、今夜はこれにて」

定吉「待て。まだ話は途中じゃ」

竜馬「はい」

定吉「念を押しておく。さな子の方からお主に言い寄っても、断ってくれ」

竜馬「(笑って)先生」

定吉「戯言ではない。いいな……では休め」

定吉、廊下を去る音。

NA「さて。そんな話は知りませんでした。私は私で、坂本様に腹を立てていました」

さな子「坂本様……坂本様!」

竜馬「ん? ああ」

さな子「御味噌汁、おかわりなさいます?」

竜馬「あ？ いつの間に飲んだんじゃろ」

さな子「もう、朝からぼんやりされて」

竜馬「かたじけない」

さな子「今日は、午後に模範試合を」

勝の声「竜馬あ！ もう乗船時間だぞう！」

竜馬「あ、勝先生じゃ。すまん、さな子さん」

さな子「え？」

竜馬の声「午後には戻るきに〜！」

さな子「またですか？ ちょっと坂本様！」

NA「再び江戸に戻られた坂本様は、剣術修行にはちっとも身が入らず、あの勝海舟先生にあちこち連れまわされて志士活動に奔走しているのです。約束が違うわ」

さな子「もう、午後になっても戻って来ない」

定吉「うむ」

さな子「まったく何をしてるのかしら」

定吉「そう怒るな。竜馬だけではない、他の門弟たちも剣術に身が入らん」

さな子「異国攘夷、天下回天って、ご自分の技も半端な方々が？」

定吉「家に手紙ばかり書いていた、あの竜馬じゃ。国を捨てて浪々の身になるとは、よほどの志あつてのことじゃろ」

さな子「そうかもしれないけど」

定吉「当世、これがの男子の生き様なんだろう。大目に見ろ」

NA「父はそう言うのですが、私は釈然としない気持ちがあぐえません。何の力もない若い方々がお酒を飲んで論じて、これで時代がどう動くというのかしら…」

もともと坂本様は、議論よりも勝先生についてお船のことを学んでいるようでしたが。

そして、ある夜」

複数人の喧騒。「火事じゃ」「水は？」

定吉「さな子！ 起きろ、火事じゃ」

さな子「火事！」

定吉「すぐ外へ逃げろ」

NA「廊下へ走り出ると、なんとということ、はす向かいの坂本様の部屋から、火が出ているのが見

えました」

さな子「坂本様！ 坂本様は！」

定吉「落ち着け、竜馬はまだ帰っとらん」

さな子「無事なの？！」

定吉「心配いらん。逃げるぞ」

火事の喧騒……おさまって。

NA「幸い被害は屋敷の一部のみで、明け方には収まりました。問題は火事の原因です」

定吉「火付けじゃな」

さな子「火付け？ なぜうちの道場が？」

定吉「わからんが、他に火元がない」

さな子「火元って、坂本様の部屋でしたわね」

竜馬「……すまん、わしが狙われたんじゃろ」

さな子「坂本様、今、お戻りになったの」

竜馬「ああ……桂たちと飲んでおった」

さな子「あんまりじゃないですか」

定吉「さな子」

さな子「こんな時間に帰ってきて、狙われる様な事をしてらっしゃるの」

竜馬「ああ、している。……すまない」

さな子「あやまっていただきたくて責めているではありません」

竜馬「しかし、わしのせいだ」

さな子「坂本様、どうして最近そんなに暗い目をしてらっしゃるの」

竜馬「暗い目を、しちよるか」

さな子「してらっしゃいます。」「一緒に黒船を見に行った頃とは大違い」

竜馬「そうかもしれん」

さな子「そんな悟ったような言葉で言わないで。あの明けの明星のような眼がさな子は」

定吉「さな子。やめるんだ」

さな子「坂本様のお考え、今のさな子には分

かりませぬ！ 失礼します！」

さな子、走り去る音。

定吉「さな子！ まったく、しょうがない奴だ」

竜馬「千葉先生、申し訳ありません」
定吉「いや。まあ、身辺のことは気を配れよ」
竜馬「これ以上、迷惑はお掛けできません」
定吉「竜馬……どく入行く。」

ドンドン、と木戸を叩く音。

竜馬「御免！ 勝先生はいらっしゃいますか」

勝「……いるよ。寝てたよ。何だ！ 急に」

竜馬「金を、貸してください」

勝「そう来たか」

竜馬「できれば十両ほど」

勝「遠慮のかけらもないな」

竜馬「では八両」

勝「値切ってるんじゃないよ。何の為の金だ」

竜馬「江戸を離れます。旅銭がございません」

勝「……どうとつか」

竜馬「天下回天の中心へ。京に、参ります」

NA「それきり丸3日間、私と坂本様は眼も

合わせずに過しました。そして私は、あることを心の中で決めたのです」

秋風が木の葉を散らす音。

NA「黄金の銀杏の葉が降りしきる、その秋の夜。紋服に身を包んだ旅姿の坂本様がわたしの

部屋の戸を開けました」

さな子「どうされたの、改まったお姿で」

竜馬「似合うじやろう。この紋付は、姉が持たせてくれたのう」

さな子「乙女様が……」

竜馬「千葉家に納めるために必要じやろうと、そう言うてな」

さな子「紋付を……どうしてっ」

竜馬「婚約のしるしに」

さな子「婚約……」

竜馬「でも、やめた」

さな子「坂本様」

竜馬「さな子さん、お別れだ」

さな子「え？」

竜馬「わしは、京へ行く」

さな子「……坂本様、お願いがございます」

NA「私は、袂から短剣を引き抜き、自分の胸元に当てました」

さな子「さな子も、連れて行ってください」

竜馬「！何をされるのです」

さな子「そんな事をお言いになると思っていました。もしお断りになるなら、今」

竜馬「馬鹿なことはおやめなさい」

さな子「本気です」

竜馬「さな子さんは知らないんじや。京は、もう戦場じや。血を求めちよる」

さな子「これでも千葉定吉の娘です。お見くびりにならないで」

竜馬「相手は剣術など知らぬ無法者じや」

さな子「分かっています」

竜馬「道場とは訳が違う。わかっちゃらん」

さな子「分かっているから道連を頼むのです」

竜馬「どうして」

さな子「一生を賭けて、坂本様を守ります」

竜馬「さな子どの」

さな子「命を産み落とし育む、その女の力を賭けるのです。守り通します」

竜馬「いかん」

さな子「行きます。でなければ、自害する覚悟です」

竜馬「やめなさい」

さな子「本気です……キヤッ」

短刀の落ちる音。

NA「何かを封じ込めるように、坂本様は私を抱きすくめました。封じ込めたいと思われたのは、私の暴走する恋心でしょうか。それとも、これから京へ旅立つ、坂本様のどうにもならない熱情でしょうか」

竜馬「さな子さん、わかっただろうかい」

さな子「坂本様」

竜馬「何か、天に動かされている運命を感じるんじゃない。この国を、この手で動かせと」
さな子「天に」

竜馬「今こゝで止まるわけにいかんのじゃ」

さな子「だから、一緒に」

竜馬「わしはこれ以上、大事なお人を失いたくない」

NA「坂本様は、抱き封じたまま、ゆっくりと私の左肩へ唇を寄せました」

さな子「何をなさるの」

竜馬「失礼する。黙っておられよ」

NA「わたしは坂本様の糸切り歯が、私の左の小袖の縫い糸を切る、かすかな音を聞きました。坂本様は糸を抜き、私の片袖を外してしまわれました。露わになった私の左腕に、冷たい秋風が吹き付けました」

竜馬「(囁く)この片袖は、わしが持つて行く」

さな子「(囁く)坂本様」

竜馬「(同様に)いくら千葉の鬼小町とて、この姿では追いかけれまい」

さな子「(同様に)卑怯だわ」

竜馬「(同様に)この袖は、見覚えがある。あの黒船の日と同じ紫……この柄は？」

さな子「(同様に)麻の葉です。私がいちばん好きな模様」

竜馬「(同様に)ちようどいい。では、行くよ」

NA「紫の小袖をひらりと袂に入れて微笑み、坂本様は去っていかれました。片袖をもぎ取られた私は、ただその場で立ちすくんでいました。銀杏の降りしきる中、これが今生の別れとなることを予感しながら」

いっそう強く風が吹きすさび……収まる。

NA「そしてまた、何事もなかったように日常が始まるのです」

定吉「じゃあ、福沢さまからの縁談、お断り

するぞ。お断りしてしまうんだぞ」

さな子「お父様、しつこい」

定吉「(学問所随一の秀才を、もったいない)」

さな子「さな子は、少しおばかさんくらいの殿方が好きなんです」

定吉「少しは女の幸せという物を考えんか」
さな子「考えません」

定吉「これからどうするつもりだ」

さな子「そうね、剣術をいかして辻斬り稼業なんてどう？」

定吉「すぐ屁理屈を言う。そんなところは竜馬そっくりだな」

さな子「無理にお嫁に行くよりましですわ」

定吉「お前みたいなのを『嫁かず後家』というのだ」

さな子「あら、毒蜘蛛みたい」

定吉「『オールドミス』とか」

さな子「ウイスキーみたい」

定吉「あるいは『負け犬』」

さな子「結局同じなのに、なぜ時代によって

呼び方が違うのかしら」

定吉「ニュアンスが違うんじゃないよ」

さな子「何の話をしてるんですか、私たち」

定吉「さあ、わしにもよくわからん」

すこしの間。

さな子「それよりお父様。もうすぐ質屋さまがいらっしやる時間では」

定吉「そうだ、しまった」

さな子「お母様の古い着物とお茶器、奥の間

へ出しておきましたから」

定吉「うむ。いたしかたないのう」

NA「坂本様が去ったその後、江戸は前代未聞の不況に襲われていました。若い方が攘夷へ熱中する時勢、わが道場の台所事情も苦しい状況。剣が必要な時代に道場が廢れる。妙な話です」

カンカーンと拍子木の音。

NA「江戸に残された私は、噂に耳を立て、必死に京の状況を探っております」

カーン(拍子木)！

噂の声「池田屋で殺人だ。新撰組がやったぞ」
さな子「長州の方、土佐藩の方々も？」

カーン！

噂の声「伏見の寺田屋で竜馬が襲われた」
さな子「逃げた？ お命は？ いえ、匿われている？ どのお話が本当？」

カーン！

噂の声「竜馬は無事だ。薩摩藩が保護した」
さな子「ああ！ よかった……ええ？」

NA「ご無事の報せには、追伸がひとつ」

さな子「所帯を持たれた？！ 本当？」

カンカンカーンと衝撃音！

勝「ああ、本当だよ」

さな子「やっぱり」

NA「私が訪れたのは、勝海舟先生の御宅。海軍兵学校が閉鎖になり、失脚した先生は、その頃
ひっそりと暮しておられました」

勝「檜崎のおりようと云って、京の街医者娘らしい。随分な美女だそうだ」

さな子「『おりよう』さん」

勝「竜馬にべったりで、この乱世だといっのにいつも一緒にいるらしい。寺田屋騒動の時もそばに
いて、危機から救ったそうだ」

さな子「べったりですか」

勝「傷を負った竜馬の傍にいて、片時も離れずに看病したらしいよ」

さな子「それで、『結婚されたのね」

勝「祝言の媒酌人は三吉慎之介らしい」

さな子「祝言？ あの形式嫌いの坂本様が？」

勝「ああ」

さな子「何だか、あやしいわ」

勝「そついう言い方はないだろう。ま、竜馬の恋人なら仕方がないか」

さな子「いいえ、何を約束した仲でもありませんし。きつと勘違いでした、若い日の」

勝「そつは見えなかったがねえ」

さな子「真つ白に忘れます」

勝「真つ白に、かい？」

さな子「もう坂本様の中にさな子はおりません。ですから、私もあの方を忘れます」

勝「しかしお前さん、これからどうする」

さな子「今までと変わリませんわ。剣術さえあれば、さな子は幸せです」

勝「そつかい。そうだな。……時代だな」

さな子「時代？」

勝「これからは女にも一生の仕事が必要だよ」

さな子「お褒め頂いているのかしら」

勝「うちの娘達にも剣術をさせとくんだった」

さな子「勝様のお嬢様でしたら、お船のことの方がいいんじゃないかしら」

勝「ほう？」

さな子「剣術より、今からは重宝されますわ」

勝「全く、あなたと竜馬は似ている」

さな子「あら」

勝「突拍子もないが正論だ。かなわない」

さな子「父は屁理屈な所が似てると申します」

勝「ハハ、同じことだよ」

NA「時代、世相はどんどん動いて行きます」

カーン(拍子木の音)！

噂の声「討幕派がいよいよ攻めてくる。王政復古らしい」

さな子「王政復古？そんな」と可能なの？」

カーン！

噂の声「可能じゃ。薩摩と長州が手を結んだ」

さな子「坂本様が間に立って？すいいわー！」

カンカーン！

噂の声「大政奉還じゃ。將軍慶喜が逃げたぞ」

さな子「じゃあ坂本様も、もうすぐ江戸に（言いかけて）」

定吉「さな子！」

さな子「お父様。何かあったの」

定吉「竜馬が、殺された」

入門、黒船、喧嘩、片袖の別れ…

今までの竜馬の声が重なり押し寄せ

NA「聞いた瞬間、忘れたはずの想い出が大波のように私の心を乱しました。追いかければよかったです。あの片袖の夜、あるいはそれから後の幾千もの夜、いつだって旅立てば、こんな日は迎えずにすんだのに」

細かい氷のような雪が降りつける。

……ザツザツと雪を踏み走る音。

NA「外は、雪が降り始めておりました。

走りました。江戸城下を抜けて、品川、そして保土ヶ谷から浦賀道へ。あの日と同じ風景が、白く埋もれていきます。氷のような初雪が、私の心まで刺さってくるようでした」

波の音…。

NA「雪に覆われた浦賀港には、勝海舟先生がひとり、海を見ておいででした」

勝「さな子さん。あなたもここへ来たか」

さな子「真っ白に忘れるなんて、無理でした」

勝「むい話だ。若い命を」

さな子「お願い、もう終わらせてください」

勝「終わらせるっ」

さな子「坂本様は全てを尽くしました。でも古い方々のご決断がないと、この乱世は終わらないのでしょっ」

勝「ああ。……オしは、動くよ」

さな子「勝先生」

勝「徳川幕府三百年の歴史がなんだい。俺は、もう振り返らないよ」

リーンゴーンと荘厳な鐘の音。

噂の声1「将軍が、江戸城を明け渡した!」

噂の声2「新しい時代、明治だそうだ」

荘厳な鐘の音、なお高まって。

NA「そしてまた、何事もなかったように日常が始まるのです。生き残った人間だけで」

鐘の音、学校のチャイムの音へと。

NA「明治の時代。私は四十を過ぎ、女学校の舎監となりました。ご華族やご公爵のお嬢様が通う、新しい時代の新しい学校です」

女学生たちの明るい笑い声。

女学生1「さな子先生、あの坂本竜馬殿のお許婚だったって、本当?」

さな子「あなたたち、噂話がお好きねえ」

女学生2「だって、お父様がおっしゃってよ」

女学生1「ね、先生。思い出のお品とかあるんでしょう?」

さな子「残念でした。ないわよ」

女学生2「坂本様、冷たいお人だったの?」

さな子「盗られた物ならあるわ。麻葉の片袖」

女学生1・2「え〜!」

さな子「お見せできなくて残念でした」

少女達の嬌声と、チャイム音。

NA「そんな生活を送る日々の中、意外な人物が私を訪ねて来られました。

坂本様の妻、おりょうさん。お酒にだらしない美人、というのが専らの評判でしたが、実際はどこかあどけない、可愛い方でした」

りょう「お初にお目に掛かります」

さな子「ええ、「ちび」そ」

NA「お着物は上質でしたが、足袋に髪の毛と綿ほりが付いていました。暮らし向きが乱れてらっしゃるといってお話は本当なのだろう、と思いました。ちょっと、色眼鏡の掛かった見方でしようか」

りよう「ちよつと、そんな値踏みするような
眼で見ないでよ」

NA「このおりようさんは、坂本様の記録を残す方々に、私の悪口をさんざん言った方なのです。少しの意地悪は」容赦ください」

さな子「私の事、色々とお話してるみたいね」

りよう「いけない。知ってました？」

さな子「華族女学校で教えてますの。女生徒はみな耳が早いものですから」

りよう「ふーん。道場は？」

さな子「人手に渡りました。ご時勢ね」

りよう「剣もお止めになったの？」

さな子「学校で教えてますわ。薙刀が主ですけど、時々剣も振ります」

りよう「さすがは千葉の鬼小町さまね」

りよう「あなたのせいよ」

さな子「何が？」

りよう「私が坂本の家を出たのは、あなたのせい。だって私、土佐ではお妾扱いよ」

さな子「まさか」

りよう「坂本の家では、あなたと竜馬が婚約した事になってるわ」

さな子「でも、あなたと結婚された」

りよう「そうよ。私は竜馬の妻よ」

さな子「その話をしに来たの？」

りよう「いいえ。坂本の家が一番の願いは、竜馬が剣のお師範になる事だったって話」

さな子「坂本の家の方々の……」

りよう「あなたと結婚して、土佐で」道場を開いて生きて欲しかったんだわ。天下の志士なんか

にならずに」

さな子「はじめに江戸へ出される時は、そう思われたかもしれないけど」

りよう「今だっと思ってるわよ。天下でどんな大きな仕事をされて栄光を受けても」

さな子「そうかも、しれないわね」

りよう「暗殺なんて、家族は誰も望みはしないわ。それは私も一緒だけど」

NA「おりょうさんは、涙を落とさずに窓の外の女学生を睨みつけるように眺めました。私たちにも、あんな娘時代があったのです」

さな子「おりょうさん」

りょう「何」

さな子「あの人の側にいてくれてありがとう」

りょう「あなた、恋敵に何を言ってるのよ」

さな子「恋敵なんて。あなたは妻でしょう」

りょう「どうかしら。だって竜馬は…」

さな子「何？」

りょう「いいえ。やっぱり言わないわ」

さな子「そう。なら聞きたくないわ」

りょう「竜馬の言葉よ」

さな子「そうでしょうね」

りょう「私、今を逃したらもう二度と伝えにはこないわよ」

さな子「勝手にあそばせ」

りょう「もう。噂に違わず可愛げがないわね」

さな子「あなたこそ」

さな子とおりょう、笑う。

りょう「これを置いていくわ。私が帰ってから、お読みになって」

NA「おりょうさんはそう言って、茶色く色あせた紙包みをひとつ、机に置かれました」

さな子「もしかして、麻の葉の小袖？」

りょう「袖？ 何の話」

さな子「ごめんなさい、何でもないわ」

りょう「さてと。用事はこれで全部おわり」

さな子「もう行かれるの？」

りょう「婚約者が待ってるのよ。私、再婚することにしたしまして」

さな子「そうでしたの」

りょう「白無垢なんて歳じゃないけど、女ひとり、いつまでもお運び仕事もできないし。私、お針の内職も身売しも向かなくて」

さな子「…おめでとういいます」
りょう「さな子さんがうらやましい。」「自分の器量で食べていかれて」
さな子「おりょうさん、遠くへ行かれるの？」
りょう「浦賀よ」

波の音がする。

NA「おりょうさんはそのまま西村松兵衛さんと一緒にになり、六十六歳で亡くなるまで浦賀で過ごされました。再婚後は人生を変える決意だったのか、名を『まつ』としていましたが、お墓には『坂本龍馬の妻・龍子』と刻まれております」

波の音、高まって…フェイドアウト

NA「さて、このお話もそろそろおしまいです。あとは残されたひとつの謎。坂本様がさな子を愛して下さっていたのか、それともただ勘違いだったのか。どうでもいいと思われる方はここでお別れでございませう。さようなら」

りょうの声「手紙よ。あの人の」

NA「さっそく私は、その手紙を開きました」

竜馬(朗読。以下同様)「さてさて、この話はまだ大きな声では言われんぞよ。ちと訳がある」

NA「なんででしょう、このもったいぶった始まりかたは。宛名は乙女様。江戸から土佐へ帰る道中の手紙でしょうか。どうやら私の紹介のようです」

竜馬「道場にさな子なる娘あり。剣術に優れ、十四歳にて剣術免許皆伝、切り紙の腕前馬によく乗り、怪力恐るべし。顔かたちは、まあまあよしとすべし」

NA「なんだかちよつと失礼ですが」

竜馬「幼名は、なんとなんと乙女と言ひし候。そして、ここからが要旨よ」

NA「要々？」

竜馬「はじめて江戸に入りし頃よりお互いに想いしが、この度とうとう、千葉先生より結婚のお許しの出でし候。詳しくは土佐に着きし折に、「報告いたしたく。竜」

さな子『お互いに、想いし』……』」

竜馬の声「あ、さな子殿、後ろ！」

さな子「え？」

パン、と軽く竹刀の音。

竜馬の声「隙あり一本です。まさか、こんな子供だましの手につかかるとはのう」

さな子「ウソ。待って！」

竜馬の声「待たれんぞよ、さな子どの」

さな子と竜馬、2人の笑声に、

明治の訪れを告げた鐘の音が重なる。

片袖の恋

－ 千葉の鬼小町・さな子 －

2014年3月16日 発行

著者 三月千尋

発行者 李鳳龍(オオハラ.李.ヒデハル)

発行所 描楽書蔵
郵便番号 135-0016
東京都江東区東陽1-28-13-401
お問い合わせ oohara.lee@ka-kuzo.jp
サイト <http://www.ka-kuzo.jp>

本作品のコピー、印刷、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本作品を代行業者等に依頼してコピー、印刷、スキャン、デジタル化する事はたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。